

「2020年のクリスマスの意味」

理事長・チャプレン 井上 良作

光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

(ヨハネによる福音書1章5節)

キリスト教徒が多くない私たちの日本でも、12月24日をクリスマス・イブ、25日をクリスマスとして楽しみに過ごすことが定着しています。商業的には街中は、25日になるとクリスマスの飾り付けをすぐに片付け、お正月商戦へと一晩で一変します。

キリスト教会ではクリスマスをイエス・キリストの誕生日ではなく、誕生をお祝いする日として記念します。いつ頃からこの祝祭の習慣が始まったかという、紀元4世紀のローマ帝国時代に行われた教会の重要な会議で12月25日をクリスマスの祝祭日として定めたとされています。キリスト教が最初に広まった北半球においては、毎年夏至が過ぎると冬至に至るまで一日一日と日照時間が短くなり冬へと近づいていきます。私たちは日に日に暗くなっていくこの間、寒さや寂しさ、生きることの辛さをより強く感じます。そして、一年で最も日が短い冬至を過ぎると、少しずつ少しずつ日が長くなり、太陽の復活、命の再生に向かって進んでいるように感じるものだと思います。ローマ時代の教会の人々は、救い主イエス・キリストの誕生をお祝いするのに最適な日はいつだろうかと考えて、この太陽が甦る時節をその時と定めたのでした。なぜなら、イエス・キリストは「世の光」としてこの世に来られたと聖書に書かれているからです。

2020年は新型コロナウイルスに世界中が支配されたような一年でした。亡くなられた方々、愛する人を失われた方々には心よりお悔やみを申し上げるほかありません。また、現在もウイルスと闘っておられる方々のために声援を、医療現場や保健行政に携わる方々には感謝と祈りを贈らせていただきたいと思います。春先の感染拡大から始まった全国の緊急事態宣言による学校休校は、児童・生徒・先生・ご家庭の皆にとって本当に大変なものでした。先の見えない暗闇に閉じ込められたような感覚がとても辛かったですね。けれども、みんな本当によくがんばったのです。完全にと言えるのはいつかはまだ分かりませんが、私たちは確実にこれを克服しようとしているのです。

このような暗闇に閉ざされた一年でしたが、そうであるからこそ、今年のクリスマスをよりいっそう深い喜びをもってお祝いしたいと私は考えます。『光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。』一日の中で最も暗いのは夜明け前であり、冬至の後には光が増していく嬉しさがあります。暗さが深いほど光の輝きはより鮮明になります。イエス・キリストは光としてすべての人の心を照らすために世に来られました。すべての人が神様に愛されている子であることを知らせ、人間の罪と死の問題を解決し、歴史の終わりは破滅ではなく完成と希望の時であることを証しするために私たちの世に来られたのです。「暗闇は光を理解しない」とは、この光は暗闇に飲み込まれたり支配されたりすることはない、という意味です。私たちに与えられている光は、空しさや失望や閉塞に負けることはないのです。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネによる福音書3章16節)

クリスマスの真実は思いもかけないような素晴らしい希望の光、神様からのプレゼントなのです。どうぞ今年のクリスマスがこの光に気づき心温まる時でありますようにお祈りいたします。